

新疆における中国ナショナリズムの展開（政治行政 学科創立二十周年記念号）

著者名(日)	原 百年
雑誌名	山梨学院大学法学論集
巻	68
ページ	189-206
発行年	2011-11-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00000536/

論
説

新疆における中国ナショナリズムの展開

原
百
年

目次
一 はじめに
二 独自性の希求
三 均質性の希求
四 有価性の希求
五 主権性の希求
六 おわりに

一 はじめに

『ナショナリズム論』（二〇一一）において、ネーションの重要な特徴として以下の四点を挙げた。すなわち、そ

の構成員が独自性を有するということ、そして比較的均質であること、そのような構成員からなる共同体が賞賛されるべき存在だということ、その共同体に自決権 (rights of self determination) があることである。それらの特徴から、「ネーションとは、独自性、均質性、有価性、主権性を有すると考えられる概念的共同体カテゴリーである」と定義した⁽¹⁾。一方ナショナリズムを、上記の「ネーションという共同体カテゴリーに言及する言説編成である」と定義した⁽²⁾。ここでいう「言説編成」とは、単なるばらばらな対話や言語活動ではなく、「ネーション」という共同体に関する意味上のまとまりがあり、その意味を編成する対話の集合体である。また、それと表裏一体の非言語的なサインやシンボル、フィジカルな習慣や行動を含む。本論文では、そのような言説編成の言説分析は行わないが、それらの結果生じるであろう「独自性の希求」「均質性の希求」「有価性の希求」「主権性の希求」を、中国の新疆ウイグル自治区をケースに考察する。

二 独自性の希求

ネーションは独自性を有するとされる共同体である。なぜなら、独自性がなければ他のネーションとの境界線が引けず、その存在を示すことができないからである。したがって、ナショナリズムは必然的にネーションの独自性を希求する。「中華民族」または「中国人」という共同体の独自性は、「中国四千年の歴史」に求められることが多い⁽³⁾。なぜなら、四千年にわたる歴代王朝が現代中国の前身で、独自の文化と発展をもたらしたと考えられているからである。

しかし、いわゆる「中国四千年の歴史」から「中国人の独自性」を見出すことは困難である。空間的な側面からいえば、ユーラシア大陸東部のどこの部分に「中国人の独自性」が見いだせるのか定かではない。例えば中国最古の王朝とされる夏、それに続く殷と周は、現在の河南省周辺を治めていただけにすぎない。紀元前におけるそれらの三つの王朝の歴史は、約一八〇〇年間にも及ぶ。「中華統一」を果たしたとされる秦（紀元前二二一―二〇七年）でさえ、現在の中華人民共和国の二〇％ほどの国土を統治していただけであつた。要するに、「中国四千年の歴史」の半分は、現在の中国のほんの一部の地域の歴史でしかない。一八世紀の清の時代に現在の版図に近い状態になったが、モンゴル族、ウイグル族、チベット族をはじめとする少数民族が住む地域（現在の版図の約六〇％）は、現地の藩王や権力者などに実際の統治をまかせた「間接統治」をおこなっていたにすぎない。ならば、空間的な観点から「四千年の歴史」というとき、それは河南省とその周辺の人々の歴史だといった方がより現実に近い。また、その地域の歴史に由来する人々の独自性があるとしても、それは河南省とその周辺に限定される。したがって「中国人の独自性」というとき、本来それはいわゆる「チャイナ・プロパー」に居住する人々の独自性を指すということになる。

それにもかかわらず、一般的に「中国四千年の歴史」が暗示するネーション空間は現在の中華人民共和国の版図である。それは、チャイナ・プロパーの歴史と独自性、例えば「中国らしさ」を表象する漢語、山水画、京劇、太極拳、チャイナ・ドレス等をもって、それらを中国人全体の独自性として規定する、一種の虚構である。少数民族からすれば、それは漢族中心の中華主義の押しつけだが、チャイナ・プロパーに住む漢族からすれば、それこそが「中国人の独自性」であつて、そのことに何の疑念もないにちがいない。ナショナリズムは必然的にネーションの

独自性を希求するが、中国ではそれをチャイナ・プロパーに住む漢族の歴史・文化に求める。

三 均質性の希求

前述したとおり、ナシヨナリズムはネーションの独自性を希求する。問題は、それを領土全体の独自性としてしようとすることである。つまり、その「独自性」をもって、領土全体を均質化しようとするのである。例えば「中華民族」という用語が使われたとき、人々は独自性のある「中華民族」または「中国人」という共同体をイメージするが、ナシヨナリズムはそのイメージどおりに中国国内を均質化しようとする。具体的には、漢族文化をもって領土（国家）全体を同化させようとする政策として現れる。

例えば、漢族の大量植民である。漢族が大量に植民されれば、そこは漢族文化に染まっていくことになる。中華民国時代、中国は国力不足から遠く離れた新疆地区にあまり干渉してこなかった。ところが中華人民共和国になってからその状況は変わり、大量の漢族を植民する政策を実施しはじめた。一九四九年の建国以前、漢族の人口は三万人ほどで、新疆の総人口の四%ほどであった。⁽⁴⁾ 現在では七〇〇万人（ウイグル族は八四〇万人）に達し、その割合は四〇%以上に達している。

漢族の主な移住者は、貧しく人口密度の高い中国内陸部の農民、犯罪者や「反革命分子」たちであった。彼らは、中国政府によって計画的かつ強制的に移住させられた者たちで、故郷に帰ることは許されずそのまま新疆に住み続けている。⁽⁵⁾ 普通の漢族にとって、新疆は住むのに理想的な地だとは言い難い。中華思想の中では「野蛮人の住む

地」だとされてきたし、実際に流刑の地とされてきた。そのため、新疆に自主的に移住しようとする漢族に対しては、「難儀金」や支援物資のみならず、仕事を与えるといった政策もとってきた。⁽⁶⁾ また、「兵团」と呼ばれる組織も漢族植民の大きな受け皿となってきた。兵团は日本という「屯田兵」に似た組織で、新疆の開墾と防衛を目的に一九五四年に結成された組織である。その人口は二四〇万人で、農業を中心に、工業、商業などの事業を進めている。現在は少数民族を数十万人含むが、ほとんどは漢族である。彼らもまた、原籍地への帰郷は認められていない。⁽⁷⁾ この兵团と人民解放軍に所属する漢族は新疆の人口統計に反映されないため、漢族の人口はおよそ一千万人に達し、新疆で多数派になっている。このような漢族の大量植民により、新疆内部は確実に漢族文化に染まってきている。

中国政府は漢族を新疆へ植民する一方、他方で若年ウイグル族をチャイナ・プロパー沿海部へ移住させる政策も実施している。移住させられているのは一五歳から二五歳の独身ウイグル族女性で、規模は年間数万人単位だという。特に、ウイグル族の人口比率が高くウイグル文化が強く残る新疆南部地域から、「一家に一人」のスローガンのもと、半強制的に徴集されるという。⁽⁸⁾ 米国亡命中のウイグル族女性で「ウイグルの母」と呼ばれるラビア・カーディル氏は、働きに出たウイグル族女性と漢族男性との結婚が増える可能性も指摘し、「漢民族に同化させ、民族を消す手段。弾圧が一步進んだ」と述べている。⁽⁹⁾

漢族とウイグル族の結婚奨励政策も、同化政策の一例である。一九九〇年代から自治政府は、漢族と結婚するウイグル族に対し、年収の三倍に相当するような給付金を与えたり、より待遇のよい仕事を与えたりする政策をとってきた。これだけの優遇をすること自体、両者の結婚がいかに普通でないかを物語っているが、自治政府がどれだけ熱心に彼らの結婚を奨励しているかもうかがえる。このような政策は、新疆各地に設けられた「春堂」と呼ばれ

る政府機関で宣伝され、実施されている。そして両者の間に生まれた子どもは、自動的に漢族として戸籍に登録され、他の漢族と同じように教育をうけることになるという。¹⁰⁾このような政策でどれだけ漢族化が進んだか数字的に把握はできないが、政府の意図的な同化政策の一端がうかがえることは間違いない。

新疆の西端に位置し、ウイグル文化の中心ともいわれるカシユガルでは、ウイグル式の家屋が次々に取り壊されている。ウイグル文化が色濃く残る旧市街は市中心部に位置し、三〇〇年から一〇〇前に建てられたモスクや家屋が立ち並ぶ。細い路地が網の目のように張りめぐらされていることから、「迷宮都市」の異名を持つ。市政府は、そのウイグル文化の中心と目される旧市街の九〇％に相当する区域を一新する「旧市街改造プロジェクト」を二〇〇九年二月から開始した。「人口過密で道も狭いため、防災上危険」だというのが理由であるが、反政府勢力の温床となるのを防ぐためともいわれている。¹¹⁾このプロジェクト以前から、新市街のいたるところに中国政府関係の建物が立ち並び、その周辺に漢族が移住してきていた。したがって、街並みの漢族化は今に始まる話ではない。だが、今回のプロジェクトでその傾向は一気に加速するであろう。

新疆での同化政策は、教育面でも強化されつつある。以前から「民族融和」のための教育は行われていたが、二〇〇九年のウルムチ事件をうけ、その徹底を図る方針が打ち出された。具体的には、「中華大家庭」(小学三～四年)「民族の常識」(同五～六年)「民族政策の常識」(中学一～二年)「民族理論の常識」(高校一～二年)などの科目がカリキュラムに組み込まれ、それらを必修とした。これらの科目は、五六の民族が「中華民族」に属し、「ひとつの家族みたいなもの」という「常識」をウイグル族の生徒たちに教える。ところが、「中華思想」に由来するであろう「中華民族」という共同体からイメージできるのは、一般的には漢族である。それに属することを受け入

れるということは、ウイグル族が漢族に編入されていくことを意味する。こうした教育内容は、小学校や中学校の場合は学力試験、高校の場合は大学入試問題にも出題されるため、より徹底して教え込まれることになる。⁽¹²⁾「民族融和教育」は、ウイグル族を幼少期から漢族に同化させようとする、ひとつの同化政策強化の現れである。

政府は同化政策をすすめる一方、他方でウイグル文化の破壊を着実に進めている。ウイグル風の街並みが破壊されていることは上でも述べたとおりであるが、ウイグル文化の重要な要素であるイスラム文化もまた、さまざまな形で抑圧されている。例えば新疆北西に位置するイーニンでは、一九九七年の四月から半年で、コーランを教える私立学校一〇五校と一三三のモスクが「無許可」という理由で地方政府によって閉鎖された。⁽¹³⁾また、新疆では、公務員や学生・学童がモスクに入することは禁止されている。メッカへの巡礼に関しても、旅券の発行手続きを受け付けない、発行したとしても政府が組織する巡礼団に参加しなければならないなど、厳しく制限されている。⁽¹⁴⁾

また、イスラムの伝統であるラマダン（断食）を阻止するような政策も新疆各地で行っている。ウイグル族が大半を占める街では、ラマダンになると食堂は休業してきた。それは断食中のイスラム教徒の宗教的意志を尊重するためである。だが近年、ラマダンの時期が近くなると地元政府は食堂を開業させる通達を出すようになった。ウイグル族からすれば、これは地元政府がイスラム文化を抑圧しているのしか思えない。例えばアトシユにあるイスラム食堂三一〇店の開業率は、二〇一〇年八月のラマダン初日、九三・九％であったという。これは、地元政府が「街の利便性を確保するため」全食堂を開業させ、従わない食堂には「思想教育をする」との通達を出した結果であった。⁽¹⁵⁾ホータンでは断食中のイスラム教徒に食事をとるよう求めるなどしているという。⁽¹⁶⁾

ウイグル女性が伝統的に着用する黒いベールもイスラム文化の象徴であるが、新疆の学校や公的機関では着用を

禁止されている。二〇一一年七月一八日、ホータンでウイグル族集団と政府治安部隊との間で衝突が生じ、多数の死傷者が出た。「ベール着用禁止」が引き金だったとされる。地元政府は「美しい顔を見せ、美しい髪をなびかせよう」という標語を使い、ベールの着用をやめるよう求めていたという。⁽¹⁷⁾「ベール着用禁止」が今回の暴動の引き金だったとすれば、地元政府はかなりの強制力をもってそれを実施していたのだろう。自治政府から発せられた「ベール禁止令」は、ホータンだけでなく他の地域でも着実に実施されていたに違いない。イスラム習慣を禁止するこのような例は、ベールだけに留まらない。⁽¹⁸⁾例えば、成人のイスラム教徒が好んでたくわえる口髭についても、政府によって規制されているという。

漢族文化が強制される一方で、「イスラム的な習慣」はこのようにことごとく抑圧されている。中央政府は、中国ネーションの独自性を漢族文化に求め、それをもって中国全体を均質化しようとする。これまで述べてきたような移民政策や同化政策、そしてウイグル・イスラム文化の抑圧は、すべて中国ナショナリズムに付随する現象として現れるといえる。

四 有価性の希求

ナショナリズムは、ネーションの独自性と均質性を希求すると同時に、その有価性を希求する。歴史、文学、メディア、スポーツイベント、大衆文化の中で繰り返し語られる「ネーションの物語」は、ネーションがいかに独自で賞賛に値するかを直接的または間接的に描き出す。⁽¹⁹⁾近年話題になった北京オリンピック、上海万博、高速鉄道

(中国版新幹線)なども、「中国の独自性」を強調しつつ、それを自画自賛する一種のナショナリズムの現れである。多くの場合それらは「上からのナショナリズム」に属するが、多くの人々はそれを自らの偉業として昇華させる。ナショナリズムが大きな力を発生するのは、このように「下からのナショナリズム」が盛り上がりを見せるときである。⁽²⁰⁾

中国は「改革開放」以降、中国ネーションの有価性を経済発展と近代化に結び付けてきた。欧米先進国と肩を並べて初めて、評価されるに値すると考えてきたからである。だからこそ中国は、オリンピックや万博の開催、そして欧米風の高層ビルや高速鉄道の建設にこだわってきた。一方、「中国四千年の輝かしい歴史」からすれば、「先進国への仲間入り」は当然のごとくできなければならず、これまでそうできなかったことが「恥」であった。したがって中国の場合、経済発展と近代化を達成することは「汚名を返上」し「面子を取り戻す」こととイコールでもある。そのような羞恥心によって突き動かされる有価性の希求が、近年の中国における爆発的な経済発展の一大原動力であると思われる。近年の軍備拡張も、これと同じロジックが働いていると考える。

漢族中心の中華民族に中国ネーションの独自性を見出し、その経済的発展および近代化に有価性を認める漢族および中国政府は、ウイグル族とその文化に価値があると考えていない。つまり漢族と中国政府は、ウイグル族とその文化を軽視していて、悪く言えば蔑視しているのである。それは、彼らが中国ネーションの有価性を高めようとするナショナリズムを展開すればするほど、その傾向は強くなる。なぜなら、彼らが漢族中心の中華民族と欧米並みの経済的繁栄を賞賛するからには、それに当てはまらない要素を「蔑視すべきもの」として規定しなければならぬからである。例えば新疆自治政府は、取り壊されたカシユガルの旧市街について「旧市街はすべて土くれの家

で文化的価値はない」と述べている。そのことから、ウイグル式の家屋に何の価値も見出していないことがわかる。⁽²¹⁾ また新疆に住む漢族自身がそういうように「少数民族の人々は、漢族にゴミのように扱われる。後進的で文化レベルが低いと思われるからだ。普通の漢族にとって、ウイグル族のイメージは路上でシシカバブを売る薄汚れたムスリムでしかない」。⁽²²⁾ 漢族たちは自らが「価値ある人々」であると規定するために、ウイグル族を蔑視する。それは逆に、ウイグル族を蔑視・軽視することによって、自分たちの価値を高める行為であるといえる。ウイグル族のイスラム文化や習慣が均質化の中で抑圧されていることは前節で述べたとおりであるが、それはただ抑圧されているだけではない。それは、蔑視をともなうて抑圧されている。中国ナショナリズムが漢族中心のネーション（中華民族）の有価値性を希求するがゆえに、ウイグル族とその文化は軽視・蔑視されることを免れないだろう。

五 主権性の希求

ネーションは独自性・均質性があり、賞賛に値する価値を有する共同体として語られ、イメージされる。同時に、ネーションは近代以降の人々によってイメージされる共同体であるがゆえに、主権がある共同体とみなされる。⁽²³⁾ 近代以降、人々は主権を有する主体であると認識されるようになった。つまり人々は、「自分たちのことを自ら決める権利」を有するとされるようになった。そのような人々によって構成されるネーションもまた、主権を有するとみなされる。

中国の場合、主権は「中華民族」または「中国人」という名のネーションにあるとみなされる。したがってその

国家領域内に位置する新疆においても、主権は「ウイグル族」ではなく「中華民族」にあるとされる。ウイグル族に主権があるとすれば、それは「ウイグル族」という共同体としてのそれではなく、「中華民族」の一員としてのそれである。ただ、多くのウイグル族にとって「中華民族」とは漢族であるため、その一員であると認識し難い、されにくい。結果として、中華民族（漢族）ばかりが権利を独占して、「自分たちのことを自ら決める権利」がウイグル族には否定されている状況が続いている。

例えば、国家機関の制服は「誰がその土地を統治しているか」という主権にかかわるシンボルだが、それを着用しているのは圧倒的に漢族である場合が多い。旧ソ連の崩壊と中央アジア諸国の独立を受け、一九九〇年から一九九五年にかけて中国政府は新疆の人民解放軍の数を二倍以上に増やした。国境警備隊や治安部隊を含め、その数は一〇〇万人以上ともいわれている。⁽²⁴⁾ 彼らが行使する武力は「合法」であるばかりでなく「正当」である。近年頻発するウイグル族の暴動は、ことごとくそれらの部隊によって鎮圧されている。多数の死傷者をだした二〇〇九年のウルムチ事件では、治安部隊による無慈悲なまでの鎮圧行動が連日報道されたことは記憶に新しい。⁽²⁵⁾ それらの報道から読み取れたのは、「新疆を統治しているのはウイグル族ではなく我々だ」という漢族で占められている治安部隊の意識である。このような意識は、まさに主権にかかわる中国ナショナリズムの現れである。

官僚ポストも「誰がその土地を統治しているか」を表す主権のシンボルである。一九九七年のグルジャ事件直後、中国政府は二〇〇〇年までに中央と地方の幹部二五〇〇人を新疆に派遣し、「地域の発展や安定のための仕事に従事させる」ことを決定した。⁽²⁶⁾ その多くが漢族であることは容易に想像できよう。二〇〇九年の時点で、漢族が自治区内の官僚ポストに占める割合は約五割であった。それを考えると、漢族が自治区内の政治・官僚ポストを独占し

ているとはいえない。ただし、最も重要なポストはそのほとんどが漢族によって占められ、ウイグル族は彼らの指示に従わなければならない。⁽²⁷⁾逆をいえば、そうするウイグル族だけが官僚ポストに就くことができるのである。ウイグル族の官僚は、漢族官僚の支配に甘んずるかわりに、漢族官僚との関係を生かし貿易や不動産などのビジネス界で利益を得る。したがって彼らは、「漢族が新疆を統治している」ことを認めた上で、経済的な利益を得ようと考えている人々だといえる。このような状況であるから、自治区内の官僚ポストは実質的に漢族によって占められているといえる。これもまた、「新疆を統治しているのはウイグル族ではなく我々漢族だ」という中国ナショナリズムの現れである。

経済的な主権もナショナリズムの重要な一部を占める。しばしば「経済ナショナリズム」と呼ばれるこの現象は、国家の領域内における経済活動を、そのネーションのメンバー自身が管理運営する権利を主張する文脈で生じる。グローバル化にともない、国家内の経済活動はマルチ・ナショナルまたはトランス・ナショナルな状態が深化する方向へ進んでいるので、この「経済ナショナリズム」は「経済のグローバル化」に対抗する勢力となる。したがって、それは諸外国の経済主体を領域内から排除しようとする保護主義や戦略的経済部門の国有化といった政策として現れる。ただし、領域内に異文化地域が存在する場合は、その異文化集団も経済活動の管理運営から排除される対象となる。中国の場合でいえば、「漢族が経済活動の管理運営を独占する」状況を生じさせる。

例えばウルムチでは、二〇万人以上の動労者を抱える工業部門で九〇%以上の雇用が漢族によって占められているという。⁽²⁸⁾また、ウルムチでは漢族の失業者が数パーセントである一方、ウイグル族成人の二五%が失業中であるという。⁽²⁹⁾ウルムチ市西部にある雅瑪里克山地区は有数の貧困地帯で、三万ほどの住民のほとんどがウイグル族で

ある。粗末な家屋がひしめき、路肩のゴミなどで異臭が漂う。同地区のすぐ後ろには漢族の高級住宅群がそびえたち、両民族の格差が浮き彫りにされている。この地区の成人男性の失業率は、七〇%にもおよぶという。⁽³⁰⁾ 新疆西南部に位置するアクスは豊富な油田で有名だが、総人口の七〇%以上がウイグル族であるにもかかわらず、油田関係の労働者はほとんどが漢族だという。⁽³¹⁾ シルクロードをつなぐオアシスの街では観光が一大産業だが、ホテルやレストランはもちろんのこと、観光ガイドさえも漢族で占められているとの報告もある。⁽³²⁾ 漢族からすれば、これらの状況はある意味当然のことである。なぜなら、新疆における主権はウイグル族ではなく「中国人／中華民族＝漢族」にあると考えているからである。

ナショナリズムは、文化的な主権も希求する。いわゆるこの「文化ナショナリズム」は、ネーション領域における文化のあり方を、そのネーションのメンバー自身が決める権利を主張する文脈で現れる。二〇〇九年、清朝末期に北京の円明園からもちだされた十二支動物銅像が競売にかけられ、中国人収集家が落札しながらも支払を拒み、中国に無償で返還されるべきだと訴えた。このようにして競売を阻止した彼は、中国のネット上で英雄扱いを受けたという。⁽³³⁾ ここでなされていたのは、「中国の文化遺産は中国人のみが管理・運営する権利を持つべきだ」という主張であった。この例は外国人に対する文化ナショナリズムだが、国内におけるそれは漢族による文化的支配という形で現れる。新疆では一貫して漢語の使用を強制してきたし、前述したカシュガルの旧市街のように建築物や街の景観も「中華風」につくり変えられてきた。またイスラムの習慣を改め、漢族と同じような生活をするように圧力をかけてきたことも、前述したとおりである。このような政策の裏には、「中国における文化のあり方を決めるのは中国人／中華民族＝漢族である」という認識がある。この認識とそれからくる一連の政策や現象は、文化的な

主権を希求する文化ナショナリズムの現れだといえる。

六 おわりに

ここまで中国が新疆においてどのようにナショナリズムを展開してきたかみてきた。ネーションとは独自性、均質性、有価性、主権性を有する共同体であるとされるがゆえに、ナショナリズムはそれらの特徴に言及する（または構成する）言説編成として現れる。本論文で示した一連の現象または政策は、その文脈の中から生じたものであった。すなわち、中国ナショナリズムは結果として「中国人」または「中華民族」の独自性、均質性、有価性、主権性を希求する政策を生じさせたのである。この結果は特に驚くことではない。なぜなら、すべてのネーション・ステートは同じ原理のもとでナショナリズムを展開しているからである。日本ナショナリズムは、「日本人」の独自性、均質性、有価性、主権性を希求する政策を生じさせている。最大の問題は、「中国人」または「中華民族」が公的に五六の民族から構成される共同体として規定されている反面、実際にはそれが漢族の共同体として認識されていることである。したがって、中国ナショナリズムは実際には漢族の独自性、均質性、有価性、主権性を希求する政策として現れる。

新疆におけるウイグル族の抵抗や暴動は、この中国ナショナリズムに対する反動といえる。これまで述べてきた中国ナショナリズムは、「国家建設ナショナリズム」という種類に属する。国家建設ナショナリズムは、すでに国家をもつネーション（本論文の場合は中国人／中華民族＝漢族）がその領域内における異文化地域に対し主権を主

張し、それを確立しようとする。この場合、異文化地域の人々は主たるネーションに同化・統合されるか、社会的に排除されるか、虐殺される傾向にある。分離・独立を志向する「分離ナショナリズム」または「周辺ナショナリズム」は、主たるネーションが展開するこの国家建設ナショナリズムに対する反動として現れる。

ワシントンD・Cに拠点を置く「東トルキスタン亡命政府」は、中国からの独立を目指す。ドイツのミュンヘンに拠点を置く世界ウイグル会議は、ウイグル族の民族自決権（独立または高度な自治権）獲得を目指す。いづれにしても、それらの組織はウイグル族の主権獲得を目指す意味で、中国ナショナリズムに対する「分離・周辺ナショナリズム」を展開しているといえる。現在のところ中国国内の監視・抑圧体制が厳しいため、それらの「遠隔的な」「上からの」ナショナリズムは、限定的な影響を与えているにすぎない。そのため、新疆内で突発的な暴動はあっても組織だった抵抗運動は展開されていない。ただし、中国政府の監視・抑圧体制が崩れた場合、ウイグル族民衆が今は海外に拠点を置くウイグル・ナショナリズムに一気に共鳴し、新疆内で大きな運動となる可能性は大きい。

注

(1) 原百年『ナショナリズム論』有信堂高文社、二〇一一年。ネーションを实体ではなく一種の「概念的共同体カテゴリー」として扱う論者に、R・ブルベイカー、S・ホール、C・カルホーンらがいる。

(2) 同上。

(3) この「中華民族」と「中国人」は同義語として使われることが多い。ただし、前者には長い歴史的継続性が暗示されていて、後者はその末裔であるというニュアンスがある。公的には「中華民族」または「中国人」は五六の民族によって構成されている。

本論文では、この公的な見解に従って両者を同意語として使用する。ただし意識のレベルでは、自らがそれに属していると思わない少数民族が存在する。ウイグル族やチベット族はその代表例である。彼らからすれば、「中華民族」または「中国人」は漢族と同じである。逆に、ウイグル族やチベット族を中華民族または中国人だと認識していない漢族も多い。要するに、意識のレベルでは「中華民族」「中国人」「漢族」は同じ人々を指すといえる。

(4) 原百年「新疆における民族紛争の源」山梨学院大学『一般教育部論集』二三号、二〇〇一年一月、九四頁。

(5) 同上。

(6) 同上、一一五―一六。

(7) 「中国、兵団の暴動相次ぐ 生活困窮の不満募る―新疆ウイグル自治区」『毎日新聞』、二〇〇五年八月二七日、七面。

(8) 「若年ウイグル族女性の中国本土への強制連行」『世界ウイグル会議ホームページ』、インターネッ、二〇一一年七月二六日にアクセス。新疆南部のホータンはウイグル族の人口比率が九〇％を超え、ウイグル文化が色濃く残っている。そのホータンで、二〇一一年七月一八日、ウイグル族集団と政府治安部隊との間で衝突が生じ、多数の死傷者が出た。「学校や公的機関などで女性のベールを禁止したため」「断食中のイスラム教徒に食事をとるよう求めるなどしたため」などの理由が挙げられているが、漢族文化の強制と同化政策が反発を招いていることは確かである。「黒いベール禁止が引き金」『朝日新聞』朝日新聞社、二〇一一年七月二三日、一三三面。

(9) 「ウイグル女性、低賃金で労働」活動家、中国を批判」『朝日新聞』朝日新聞社、二〇〇七年一月九日、七面。自治政府は二〇〇六年から「就職斡旋」と称して若年ウイグル族女性を山東省など都市部へ派遣し、低賃金で仕事をさせる一方、自由に帰郷することを許さないという。

(10) 原百年「新疆における民族紛争の源」山梨学院大学『一般教育部論集』二三号、二〇〇一年一月、一一六頁。

(11) 「ウイグル式の家屋取り壊し 中国・カシユガル、再開発名目 住民「民族文化の破壊だ」」『朝日新聞』朝日新聞社、二〇〇九年八月二二日、八面。

(12) 「民族融和へ団結教育 中国、ウイグル族らにも徹底」『朝日新聞』朝日新聞社、二〇〇九年九月一〇日、九面。

(13) イーニンでは、一九九七年二月に大きな暴動が発生していた。その影響もあって「違法な宗教組織」の抑圧に力を入れたという側面がある。「中国指導部、抑圧強める 新疆ウイグル独立派の暴動活発化」『朝日新聞』朝日新聞社、一九九七年七月二一日、

四面。

- (14) 「中国 自由なきウイグル族」『朝日新聞』朝日新聞社、二〇一一年一月五日、九面。
 - (15) 同上。
 - (16) 「黒いボール禁止が引き金」『朝日新聞』朝日新聞社、二〇一一年七月二三日、一三面。
 - (17) 同上。
 - (18) 「中国当局、カシユガルでウイグル族の口ひげを禁止」『世界ウイグル会議ホームページ』インターネット、二〇一一年八月一日にアクセス。
 - (19) ネーションの原初主義的描出や起源神話も、ネーションの独自性と有価性を描き出す。これらは全てナショナリズムの一種だが、それを成り立たせているのが、E・ホブズボームがいう「伝統の創出」という行為である。Hobsbawm, E. and Ranger, T. (eds.) (1983) *The Invention of Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press.
 - (20) 北京オリンピックと上海万博は、さまざまな批判があったものの一応「成功」とされた。しかし高速鉄道に関しては、二〇一一年七月二三日に温州で衝突脱線事故を起こし、その後の処理の「醜態」もかさなり、「失敗」の烙印が押されてしまった。テレビ放送等でのインタビューで多く人が「中国人として恥ずかしい」と答えていたが、裏を返せば、高速鉄道が「中国人の誇り」とみなされていたといえる。これらの感情は、ネーションの有価性を希求するナショナリズムによって生み出される。
 - (21) 「ウイグル式の家屋取り壊し 中国・カシユガル、再開発名目 住民『民族文化の破壊だ』」『朝日新聞』朝日新聞社、二〇〇九年八月二二日、八面。
 - (22) 原百年「新疆における民族紛争の源」山梨学院大学『一般教育部論集』二三号、二〇〇一年一月、九五頁。
 - (23) Anderson, B. (1991) [1983] *Imagined Community*, rev. edn, London: Verso, p. 7. (白石隆・白石^{xy}訳『増補 想像の共同体』NTT出版、一九九七年)
 - (24) "Military Buildup Reported in Eastern Turkestan," *Eastern Turkestan Information Bulletin*, Vol. 5, No. 4, August 1995, p. 2.
 - (25) ウルムチ市内の漢族市民は棍棒やナイフを手にして街へ繰り出し、ウイグル族を攻撃して「報復」した。このような運動も、「新疆を統治しているのはウイグル族ではなく我々だ」という民衆レベルにおける中国ナショナリズムの側面であるといえる。
- 「ウイグル暴動」一カ月 くすぶる対立 拘束二〇〇〇人超『不当な取り締まりだ』『読売新聞』読売新聞社、二〇〇九年八月六

日、七面。

(26) 「新疆ウイグル自治区安定へ幹部大量派遣 中国共産党中央」『朝日新聞』朝日新聞社、一九九七年三月八日、九面。

(27) 「ウイグル族に亀裂『漢族にこびる連中ほど豊かになる』貧困層に根強い不満」『読売新聞』読売新聞社、二〇〇九年七月十四日、六面。

(28) *The Wall Street Journal*, New York: Lightbulb Press, October 21, 1994.

(29) "China Fears For its Wild West", *The Economist*, London, November 1997.

(30) 「ウイグル族・漢族、経済格差深刻」『朝日新聞』朝日新聞社、二〇〇九年七月十五日、七面。

(31) *Reuters*, New Jersey: Englewood Cliffs, April 25, 1993.

(32) Reports by Thomas Allen, *National Geographic*, Washington: National Geographic Society, March 1996.

(33) 「中国、文物返還へ熱気」『朝日新聞』朝刊、二〇〇九年三月十八日。